

振興部の **知っところ！神美**

知っておいてほしい神美を紹介します。

【長谷編Ⅱ】

神美の口伝えあれこれ

三、大安寺の仏様

鉢山村の六兵衛さんの男衆が、毎日大安寺のお堂の前を通過して立石村の入会山に山仕事に通った。

ある日のこと、お堂の前にたたずんだ男衆は仏様をお願いごとをした。「今晚の夕食はお粥だろうか、それとも飯だろうか、若しお粥なら笹を、飯であれば木をだしてほしい。帰りにはお願いします」と願った。日暮れ、男衆は山仕事につかれてお堂の前に立って驚いた。朝の願いごとがでていた。帰宅して夕食のぜんを見て二度びっくり。それからはお堂の前での願いごとが楽しみで、ほんとうによく合わせる仏様とますますあがめていた。

ある朝、いつものように願いごとをたのんで、帰宅しての夕食が願ったうらないと違っていた。男衆は大立腹し、翌朝をまちかねてお堂の前にさしかかり、やにわに手に持った鎌を仏様の胸につきたてた。仏様の胸からは、真赤なろく朱が流れでた。

使った鎌は、今の大安寺記念碑の下に埋められていたが、後の人が残された鎌のさびあとをみて当時を思い起こしたと伝えられる。

「豊岡民話 耳ぶくろ(昭和 50 年発行)」より

四、萬燈の由来

萬頭山は、昔から夕立ちがよく巢をかける山であった。

村人は、頂上に大きく茂った松林を眺め、夕立ちの巢をかけないうちにと、立石と倉見、長谷の三村で分割して売りさばき、跡地には、後の城主が千畳敷の山城を築いた。下の平地に、靈感伝わるかんおん、小城下、大城下、山に登って休み場、潜り屋敷。落しが谷、千畳敷と続いている。

その萬頭山にまつわる話がある。

享保の頃のこと、立石村に長谷、倉見、上鉢山の三箇村共有山の紛争事件がおきた。江戸表での裁判で、立石村の黒兵衛が、三箇村側に有利な証言をしたことで、長谷側の勝訴となった。激昂した立石村の人々は黒兵衛をたたき殺してしまった。

長谷側は黒兵衛の霊を供養し、盆月の二十四日に山頂の立石村の方向に一二〇燈のたいまつを連ね、太鼓岩の太鼓の合図で萬燈の火をともした。

近在の人々は、毎年萬燈の偉観にうたれ見物に集った。特に納屋の十五郎茶屋の眺はずばらしく、一晩の客のもうけで一年中の生活がおくれたそうだ。

近年では、鱒山から長谷橋の川土手で、報謝の萬燈がともされ今に続いている。

先人、川口治左エ門氏からの口伝え短話四題、古老、村尾国太郎氏(九十二才 明治十六年九月十三日 長谷生れ)より聞き記す。

伊崎 勉記 「豊岡民話 耳ぶくろ(昭和 50 年発行)」より

